


## 赤いバラが青く見える...「色弱」への理解深めて 愛知の自治体で講座

有料記事

富岡崇 2024年2月2日 7時00分



色弱の体験ができるゴーグルを着け、色紙の分類をする参加者=2023年12月7日午前11時0分、愛知県豊田市、富岡崇撮影 



色の見え方の違いから日常生活に困難を感じる色弱者について、自治体職員に理解を深めてもらう取り組みが続いている。愛知県が主催するもので、住民向けのポスターやパンフレットを作る際、正しい情報を伝えられるよう色に配慮する「カラーユニバーサル」の意識を高める狙いがある。

「何も考えずにパッと分類してみてください」

昨年12月7日、豊田市役所。約20人の市職員が、色弱と同じ体験ができるゴーグル「バリエーション」を身につけ、色紙50枚を色の系統別に五つに分類した。

青系の中にピンク色、緑系の中にオレンジ色の色紙がまじり、不正確な分類が目につく。10分ほどの作業の後、ゴーグルを外すと、自分が分類した色紙を見て驚く参加者もいた。

2019年に始まった取り組みで、県が主催。業務を委託されたNPO「人にやさしい色づかいをすすめる会」が講座を担当する。

県は15年に「愛知県 障害者差別 解消推進条例」、16年に「手話言語・障害者コミュニケーション 条例」を制定。県障害福祉課によると、障害の有無にかかわらず情報を正しく伝えることへの意識が高まり、「視覚」に着目したという。

18年に視覚情報を正しく伝えるための指針をまとめた冊子を作り、19年から自治体向け講座を始めた。以降、コロナ禍で見送られた20年度を除き、毎年開催されている。今年度は豊田市のほか、1月に日進、知多、長久手の3市で実施され、今月14日には尾張旭市でも予定されている。今年度の分を含めると延べ20カ所で講座を開いたという。

## 「赤いバラが青色に見える」 後天的に色弱になるケースも

豊田市の講座では当事者である色弱者も加わった。

「投票用紙の色が区別できず、投票にきた人に用紙を手渡すときの説明に困難を感じた」。市下水道施設課で働く松本邦宏さん(55)は選挙の業務で戸惑ったという。

講師の一人、片岡晴彦さん(66)も「赤いバラが青色に見える」と、スライドを使いながら自身の見え方を説明した。仕事上でも困難を感じたことがあったといい、「赤と黒 の色の区別が難しく、赤いペンで手紙を書いてしまった」。

人の目には、3種の「錐体(すいたい)」と呼ばれる 視細胞 があり、光を感じる度合いの違いによって色を識別している。だが色弱者は、この錐体のうち1種類がなかったり、感度がずれていたりすることによって一般的な見え方と差が生じるという。

NPO法人「カラー ユニバーサルデザイン 機構」(東京都)によると、日本の場合、先天的に色覚に異常があるとされる割合は、男性の約20人に1人、女性の約500人に1人、日本全体では320万人以上いるという。白内障 など病気の影響で後天的に色弱になるケースもあるという。

だが、身体障害者手帳 の視覚障害の項目には「視力」や「視野」についての記載はあるが、「色覚」についてはない。色覚の差異によって生じる困難について、まだまだ認識が不足している、と講師の富永さかえさん(69)は指摘する。

「色弱であると生活でどのような困難があるのか、講座を通じ一人でも多くの人に知ってもらえたら」と話す。

豊田市人事課職員の石倉沙里奈さん(27)は市民向けにチラシなどを作ることが多いという。「知識だけでなく、手を動かしながら具体的な改善方法を学べたので業務に役立てたい」(富岡崇)

---

朝日新聞デジタルに掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

Copyright © The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.